



慢性期（生活期）の言語聴覚療法に関する研究

保健福祉学部 コミュニケーション障害学科
助教 中村 文（なかむら あや）

連絡先 県立広島大学 三原キャンパス 1321号室
Tel 0848-60-1120（代表） Fax 0848-60-1134

専門分野： 言語聴覚障害学

キーワード： 慢性期（生活期）、コミュニケーション障害、摂食・嚥下障害、集団コミュニケーション療法、当事者の視点

● 主な取り組み・活動

慢性期（脳卒中であれば、発症後6か月以降）あるいは、生活期（生活の場を家庭や施設に移し、生活のケアやリハビリを行う期間）におけるコミュニケーションや食べたり飲み込んだりすることの問題及び、それらに対する言語聴覚士の関わりについての研究を行っています。

① 「できる」-「している」の乖離を払拭する治療に関する研究

リハビリテーションの実施によって訓練の時に「できる」ことが増えても、普段の生活で「する（している）」ことがなかなかできない方もいらっしゃいます。慢性期（生活期）では、このような「できる」能力と「している」能力の乖離を払拭し、その方が最大限のお力を生活内で使いこなせるように援助することが求められています。

集団コミュニケーション療法の、特に少人数（2～5人）での実施が、失語症や話し言葉の障害をお持ちの方の「できる」-「している」の乖離払拭に適していると考え、実践と検証を行ってきました。

② 当事者の視点（想い）に関わりに関する研究

生活の場で、最大限のコミュニケーション能力を発揮するためには、当事者のコミュニケーション障害に対する視点や想いを理解し、それに応じた援助を行うことが必要です。

わが国における当事者の視点に関する研究は、失語症に比べ、話し言葉の障害において少ないため、話し言葉の障害をお持ちの方やそのご家族の視点や想いを理解するための調査を行い、どのような援助が必要かを検討し

ています。

③ 認知機能の摂食・嚥下機能への影響に関する研究

慢性期では、認知機能障害によって「どんな物を、どのタイミングで、食べる（飲む）のか」などを判断することが難しいために、食べたり、飲み込んだりすることが難しくなっていることも少なくありません。

そのため、認知機能が食べたり、飲み込んだりすることによってどのように影響しているのかを、また、認知機能障害による悪影響を軽減するための方法を検討しています。

● 今後の目標・抱負

当事者の視点（想い）を把握した上で、また、認知機能が摂食・嚥下機能にどう影響しているのかを解明した上で、必要な援助方法を具体的に提案していきたいと思えます。

● 地域・社会と連携して進めたい内容

当事者の視点（想い）を広く社会に認知してもらうために、行政や職能団体と連携していきたいです。また、集団コミュニケーション療法、摂食・嚥下障害に対する介入の実践では、医療機関や介護施設と連携していきたいです。

● これまでの連携事例・実績

- 1) 中村文, 遠藤明良, 森本寿代, 石倉隆: 失語症者に対する集団療法の効果—「しているあいさつ」と「できるあいさつ」の乖離払拭—. 第11回日本言語聴覚士協会総会・日本言語聴覚学会, さいたま, 2010.
- 2) 中村文, 今泉敏: 予告の適否が飲料の嚥下運動に及ぼす影響—嚥下音および表面筋電図を介した検討—. 日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌, 15:264-273, 2011.
- 3) 中村文, 小澤由嗣: dysarthria患者とその家族のコミュニケーションに対する意識—予備調査—. 県立広島大学保健福祉学部誌 人間と科学. 12:91-102, 2012.